



NAGOYA UNIVERSITY

名古屋大学環境報告書 2013

自己評価委員会報告書

名古屋大学環境報告書自己評価委員会

1. はじめに

名古屋大学は、「名古屋大学環境報告書2013」の信頼性を高めるために、環境配慮促進法第9条に基づき、自己評価を実施しました。実施主体は、錦見端（環境安全衛生管理室特任准教授）を座長とし、中野牧子（大学院環境学研究科准教授）、日影達夫（全学技術センター技術職員）、丹下稔浩（総務部総務課専門員・企画広報掛長）、島岡宏幸（法学部三年）からなる名古屋大学環境報告書自己評価委員会です。今年度も、教職員および学生に自己評価委員として参加して頂くことによって、評価に多様な視点をもたせるようにしました。

名古屋大学環境報告書は、2009年度に東洋経済新報社・グリーンリポーティングフォーラム共催「第13回環境報告書賞・サステナビリティ報告書賞（公共部門）」を受賞するなど、すでに一定の社会的評価を得られるような水準にまで達していますが、こうした到達点に甘んじてしまうことのないよう、より一層、厳格な評価を行うよう務めました。

2. 実施した手続きの内容

自己評価は、2013年9月3、4日にわたって開催した委員会を実施しました。

評価は「環境報告書の信頼性を高めるための自己評価の手引き」（環境省、平成19年12月）に準じ、環境ガイドライン記載項目を示した評価表を用いて実施しました。

これに加え、2012年度の自己評価報告書で記載された全般的な事項について、本年度での対応状況を確認しました。

さらに、ステークホルダーとして特に名古屋大学学生および教職員を意識し、委員各人の環境報告書全体に対する印象や感想をもとに、環境報告書全体についてもコメントしました。

以下に、上記3項目の観点からの評価結果を順に記載します。

3. 評価結果

(1) 環境報告ガイドライン記載項目

ガイドラインに記載の29項目を対象にしました。その詳細は評価表（注）に記載していますが、その中で今後の課題として以下の点について記載します。

A. 経営責任者の緒言

昨年度の所見に対応し、より具体性が増した記載となりました。しかし、現状に関する記載がやや簡潔すぎる

ように感じます。達成した事項については、もう少し詳しく記載し、ステークホルダーにアピールしたほうが良いと判断します。

B. 事業活動における環境配慮の取組に関する目標、計画及び実績の総括

以前より指摘されていましたが名古屋大学環境行動計画が2012年6月にはじめて策定されたことは有意義なことです。しかし、18ページの一覧表の一部に本計画に関する記載があるものの、他の目標との関連性がわかりにくく、残念ながら読者には読み取りにくい形となっています。また本一覧表の中に目標未達成の項目がいくつかありますが、これについての総括も不十分です（昨年度も同様の指摘をされています）。今後の改善を期待します。

C. 環境マネジメントシステムの状況

2ページの「編集にあたって」でマネジメントシステムについて若干言及されていますが、本文では組織図が掲載されているだけで、名古屋大学のシステムが読者にはわかりにくいと思われます。組織図と同じページに文章でシステムについて説明が必要と思われます。

D. 環境活動に伴う環境負荷及びその低減に向けた取組の状況

多様なデータを工夫して掲載している点は評価されますが、開示するデータについて統一した意図がわかりにくいと感じます（詳しいデータが開示されている分野がある反面、ほとんどデータ開示のない分野があります）。今後、開示について全体としての考え方を整理する必要があるのではないのでしょうか。

(2) 2012年度の自己評価報告書で記載された事項の本年度での対応状況

A. 読みやすさ（リーダビリティ）

紙面の工夫などにより環境報告書の読みやすさを改善する努力がなされています。図表や写真を多用し、わかりやすくなってきています。しかし、まだ不十分な部分があると思います。たとえば、CO₂排出削減アクションプランについては、Topics（5ページ）と環境負荷（26ページ下段）の両方に記載されていますが、両記事の関連性も含め、ややわかりにくい印象となっています。また図表の文字の大きさが小さく読みにくい部分があると感じました。

環境報告書の読みやすさについては、今後さらに改善されることを望みます。

B. 環境報告書作成過程への学生の参画

本年度の環境報告書作成ワーキンググループに学生は入っており、来年度以降の課題として検討ください。

C. 中長期的な目標設定の必要性および環境マネジメントプログラムの改善

中長期的目標については、2014年時点を目標とした、CO₂排出総量削減のためのアクションプランが設定されていますが、それ以降の中長期目標を検討する時期に来ていると思います。今後の検討を期待します。

前述の通り、2012年6月に名古屋大学環境行動計画を定めるなど、環境マネジメントシステム向上のため継続的に努力されていることが読み取れます。しかし、総長メッセージに記載されています「マネジメントとガバナンスの強化」が明確に読み取れるレベルにはまだ達していないと判断されます。今後、継続的にシステムを改善されることを望みます。

D. 労働安全衛生をはじめとする社会的取り組みが不十分

2012年度報告書に比べ、他大学とのコミュニケーションの機会を設けるなど、社会的取り組みを意識した内容を含めるよう努力されています。しかし、学内の労働災害データの開示や事故防止のための取り組みなどについては、まだ記載されていません。また、学内では他にも社会貢献活動などが実施されていると思います。今後、こうした点の掲載を検討ください。

(3) 報告書全体の評価

全体として、多様な成果をグラフや図などにより要領よくまとめていることは評価されます。一方、その成果を達成するための名古屋大学の努力がやや読者に見えにくいと感じました。今後、名古屋大学の改善努力と今後の進め方がわかるような記載を目指すように改善を検討ください。

多くの教職員、学生の努力によって作成されている環境報告書をできるだけ多くのステークホルダーに読んでいただけるよう、広報、周知についても今後さらに工夫されることを望みます。

4. 総括

本環境報告書は、ステークホルダーが求めていると想定される重要な情報を概ね網羅しており、昨年度に比べてさらに改善されていることが認められますが、読者に対するわかりやすい情報の提供という点では、まだ改善の余地があると判断されます。今後、さらに読みやすい環境報告書を目指し、継続的な見直しを要望します。

また、大学全体が主体的、継続的に環境改善活動を進めることができるマネジメントシステム構築も前進がみられますが、まだ途上にあると言わざるを得ません。今後、さらなる改善を期待します。



名古屋大学 環境報告書 自己評価委員会構成員(左から、丹下、日影、錦見、島岡、中野)

評価表 (名古屋大学環境報告書 2013 自己評価委員会) 1/2

	作成担当者記入欄				評価者の記入欄			
	① 記載されている箇所 (ページ等)	② 環境報告書に記載のない場合、その理由	③ 重要な情報の網羅性の評価		⑤ 正確性	⑥ 中立性	⑦ 検証可能性	⑧ 所見
			③ 重要性がない	④ 重要な情報の網羅性				
基本的項目								
BI-1: 経営責任者の緒言	1			○	○	○	○	昨年度の指摘に基づき、名古屋大学としての構想が具体的に記載され、わかりやすくなった。しかし、現状に関する記載がやや淡泊のように感じる。達成した事項については、もう少し詳しくアピールしたほうが良いのではないかと。
BI-2: 報告にあたっての基本的要件								
BI-2-1: 報告の対象組織・期間・分野	2, 8			○	○	○	○	
BI-2-2: 報告対象組織の範囲と環境負荷の捕捉状況	—	大学全体が対象のため不要	✓	○				
BI-3: 事業の概況	8-10			○	○	○	○	(1) 建物延べ床面積や組織図については、2012年度の変化について記載したほうが良いのではないかと。 (2) 教職員数については、どの範囲を含んでいるのか明示してはどうか。
BI-4: 環境報告の概要								
BI-4-1: 主要な指標等の一覧	18, 22			○	○	○	○	
BI-4-2: 事業活動における環境配慮の取組に関する目標、計画及び実績の総括	18			○	×	○	×	(1) 一覧表の記載については、改善の余地がある。たとえばCO ₂ 削減目標の「原単位」の表記が、他の場所(P18)では別の用語を使用している。用語を統一するべきである。 (2) キャンパスマスタープラン2010の目標に対する達成度は見込みであり注釈も記載されているが、よりわかりやすくするために、表中に注釈を示す記号を入れたほうが良いのではないかと。 (3) 廃棄物削減に関しては、目標と実績がリンクしていない。整合性を取るようにするべきである。 (4) 対象によって目標の対象範囲を東山、鶴舞、大幸だけに限定しているものがあるが、適否の判断がつかない場合がある。目標に対象範囲を明確に記載すべきである。 (5) 目標に対し、未達成の項目がいくつかあるが、全体としてそれに対する説明が不十分である。
BI-5: 事業活動のマテリアルバランス	22			○	○	○	○	(1) 水のInputを市水と井戸水を分けている理由がはっきりしない。分けたほうが良ければ、それに関する説明等があったほうが良いのではないかと。 (2) 昨年度比減少の場合の矢印が緑色でわかりにくい。 (3) 産業廃棄物と特別管理産業廃棄物の量の関係がわからない(昨年度は内数となっている)。
環境マネジメント等の環境経営に関する状況								
MP-1: 環境マネジメントシステムの状況								
MP-1-1: 事業活動における環境配慮の方針	6, 7			○	○	○	○	
MP-1-2: 環境マネジメントシステムの状況	19			○	○	○	○	(1) 組織図だけではマネジメントシステムの責任部署や実際の運用方法がわかりにくいので文章で説明してはどうか。
MP-2: 環境に関する規制遵守の状況	35(6-7)			×	○	○	○	(1) 全体として遵守状況を記載する節を設けたほうが良いのではないかと(重要な情報が網羅できていないと判断する)。 (2) 土壌汚染の記事については、汚染の発生年月や対策工事の状況などについてもう少し詳しく記載したほうが良いのではないかと。
MP-3: 環境会計情報	23			○	○	○	○	
MP-4: 環境に配慮した投融資の状況	—	事業の性質上記載不要	✓	○				
MP-5: 環境に配慮したサプライチェーンマネジメント等の状況	—	事業の性質上記載不要	✓	○				
MP-6: グリーン購入・調達状況	28			○	○	○	○	
MP-7: 環境に配慮した新技術、DfE等の研究開発の状況	16			○	○	○	○	
MP-8: 環境に配慮した輸送に関する状況	—	事業の性質上記載不要	✓	○				
MP-9: 生物多様性の保全と生物資源の持続可能な利用の状況	36			○	○	○	○	
MP-10: 環境コミュニケーションの状況	5, 45, 46			○	○	○	○	
MP-11: 環境に関する社会貢献活動の状況	41, 44			○	○	○	○	
MP-12: 環境負荷低減に資する製品・サービスの状況	11-15, 17			○	○	○	○	

評価表 (名古屋大学環境報告書 2013 自己評価委員会) 2/2

	作成担当者記入欄				評価者の記入欄			
	①	②	重要な情報の網羅性の評価		⑤	⑥	⑦	⑧ 所見
	記載されている箇所(ページ等)	環境報告書に記載のない場合、その理由	③ 重要性がない	④ 重要な情報の網羅性	正確性	中立性	検証可能性	
環境活動に伴う環境負荷及びその低減に向けた取組の状況								
OP-1: 総エネルギー投入量及びその低減対策	22, 26			○	○	○	×	(1) P18の目標・達成状況に対応したグラフがない。目標未達成の理由等のコメント記載も必要である。 (2) エネルギー換算係数等を記載し、他の事業者との比較をわかりやすくしたほうが良い。
OP-2: 総物質投入量及びその低減対策	—	事業の性質上記載不要	✓	○				
OP-3: 水資源投入量及びその低減対策	22, 27			○	○	○	○	(1) 東山キャンパスが増加した理由の説明を入れたほうが良い。 (2) グラフについては、積み上げグラフでなく、キャンパスごとのグラフも必要ではないか(要検討)。 (3) 水の使用量が計算値であり、実使用量ではないとのことだが、実使用量のほうが良いのではないか。
OP-4: 事業エリア内で循環的利用を行っている物質等	29			○	○	○	○	機密書類等と新聞等でリサイクルルートが2つあるが、図ではわかりにくい。
OP-5: 総製品生産量又は総商品販売量	—	事業の性質上記載不要	✓	○				
OP-6: 温室効果ガスの排出量及びその低減対策	4, 5, 22, 24-27			○	○	○	○	(1) 名古屋大学全体のCO ₂ 排出量のグラフがない(ただし、温室効果ガス総量のグラフはあり)。 (2) CO ₂ 総排出量とCO ₂ 排出量との表記が混在している。意味は違うのかもしれないが、一般読者にはわからないので、説明したほうが良いのではないか。 (3) P25の△tの意味が一般読者にはわからないため、説明が必要である。 (4) 比較ができるようにCO ₂ 換算係数を掲載すべきである。
OP-7: 大気汚染、生活環境に係る負荷量及びその低減対策	31(6-3), 35(6-6)			○	○	○	○	(1) アスベストの記載については、改善の余地がある。すなわち、吹付けアスベストは数年前に対策が完了していること、非飛散性のアスベストは法に従い適切に対応している等、実態がわかる記載が必要である。 (2) 大気汚染防止法に関する記載がない(データの開示を含め)。
OP-8: 化学物質の排出量・移動量及びその低減対策	32, 33			○	○	○	○	PRTR法の排出量や移動量を掲載したほうが良いのではないか。
OP-9: 廃棄物等総排出量、廃棄物最終処分量及びその低減対策	22, 30, 31(6-2), 42			○	○	○	○	産業廃棄物のさらに詳しいデータを掲載したほうが良いのではないか。
OP-10: 総排水量等及びその低減対策	22, 34			○	○	○	○	報告書全体から判断すると、個々の検査データを掲載したほうが良いのではないか。
環境配慮と経営との関連状況								
EI: 環境配慮と経営との関連状況	—	事業の性質上記載不要	✓	○				
社会的取組の状況								
SPI: 社会的取組の状況	4, 31(6-1), 37, 38, 41, 44			○	○	○	○	(1) 生協での食事代金の一部を開発途上国に寄付するTFTプロジェクトなどは重要な社会貢献の1つであり、記事としたほうが良いのではないか。 (2) 最も重要なステークホルダーである学生および教職員の学内での労働災害データを開示したほうが良い。
その他の記事								
表紙の説明	3			NA	NA	NA	NA	1ページを費やさず、コラム程度にしておくべきではないか。
環境報告書の自己評価	20-21			NA	NA	NA	NA	読者の観点からは、記事を巻末に記載したほうが良いのではないか。
施設管理業務の一元化について	39			NA	NA	NA	NA	
ファミリーマート名古屋大学IB館店の取り組み	40			NA	NA	NA	NA	良い記事であるが、記載されているファミリーマートの活動と名古屋大学との関係性が記載されていればさらに良い。また、記事の執筆者を明記したほうが良いのではないか。
卒業生の活躍「大気環境の現場観測」	43			NA	NA	NA	NA	卒業生の活躍がわかる非常に良い記事である。トピックスに入れたほうが良いのではないか。
ガイドライン対照表	47			NA	NA	NA	NA	

- ① 記載されている箇所(ページ等)を記入します。記載のないものは「—」を記入します。
 ② 報告書に記載の無い項目(①で「—」を記入した項目)について、記載のない理由を記入します。記載しない理由がない場合は空欄のままとします。
 ③ ①で「—」が記入されている項目について、重要性を判断します。重要性は、その情報の有無がステークホルダーの判断に大きな影響を与えるかどうかで判断します。
 重要な情報の網羅性: 事業活動に伴う環境的・経済的・社会的影響とステークホルダーの判断に影響を与える情報が網羅されていること
 正確性: 記載された情報に誤りや漏れがなく正確であること
 中立性: 意図的に偏った印象を与えるような記述がなされていないこと
 検証可能性: 第三者が情報源に遡って再現できる手段があること
 ④ 記載のある項目については、○を記入します。
 記載のない項目のうち、③で「✓」のある項目は「○」を記入します。
 ③で「✓」のない項目で、適切な理由の記載が報告書にある場合は(②参照)は「○」、無い場合は「×」を記入します。
 ⑤ ④で×を記入した(重要性があるのに記載がない)場合は、⑧の所見欄にそう判断した理由等を記入します。
 ⑥ 「正確性」の評価を行い、結果を「○、×」で記入します。
 ⑦ 「中立性」の評価を行い、結果を「○、×」で記入します。
 ⑧ 「検証可能性」の評価を行い、結果を「○、×」で記入します。
 ⑨ ⑤～⑦で「×」のものに対して⑧に所見を記入します。
 NA: 評価対象外